

鈴木正崇 [編] 『南アジアの文化と社会を読み解く』 (東京：慶應義塾大学東アジア研究所、2011年、476頁、2,000円+税、ISBN978-4-7664-1902-3)

(評) 中谷 哲弥\*

本書は、2010年5月から計15回にわたって慶應義塾大学東アジア研究所によって開催された「南アジアの文化と社会を読み解く」と題する講座にもとづく論集である。編者による「まえがき」によれば、講座の趣旨は「多様性に富み複雑で長い歴史を持つ南アジアの文化と社会の諸相を、現地での体験に根ざした観点から読み解いて、異文化への理解を深めること」にある。また、風土・民

---

\* 奈良県立大学教授 (文化人類学)

- ・ 2011, "Partition Refugees on Borders: Assimilation in West Bengal," in Abhijit Dasgupta, Masahiko Togawa, and Abul Barkat (eds.), *Minorities and the State: Changing Social and Political Landscape of Bengal*, New Delhi: Sage Publications India Pvt Ltd., pp. 66-87.
- ・ 2012, 「マーヤブルー—聖者の世界進出と生地のグローバル化」星野英紀・山中弘・岡本亮輔 (編) 『聖地巡礼ツーリズム』、弘文堂、136-139頁。

族・言語・宗教・階層・地域性などで多様なこの地域の全貌を示すことは簡単ではないとして、開発・環境・宗教・音楽・映画・観光・人権・移民等々、いわば地域横断的な現代的課題を盛り込むことで、この地域の位置づけを明らかにするとしている。

本書には計15本の論文が収録されている。まず各論文の要旨を示しておきたい。

「インド 祈りの造形—かたちから意味を読み解く」(小西正捷)は、ベンガルの民衆文化における床絵、女性のプロト儀礼、壁画、絵語りの伝統について詳述した上で、壁画や布絵などの民俗画が民族芸術や国民芸術へと格上げされ、また小刻みに切り取られて商品化されることで、本来の「祈りのかたち」たる民族造形の意味が失われつつあると論じる。

「民衆ヒンドゥー教とは何か」(三尾稔)は、インドの民衆ヒンドゥー教の特徴について、現世利益、簡素さ、具象的で触知可能な神的存在、宗派を問わない聖者信仰などの具体的事例から解説するとともに、経済成長に伴う近年の変化として宗教祭礼のイベント化・娯楽化、さらにはヒンドゥー・ナショナリスト団体の介入を指摘する。

「インドの聖地と環境問題—聖地バナーラスにおける生活と信仰をめぐって」(宮本久義)は、聖地バナーラスを取り上げて、ヒンドゥー教における水に関する思想について解説したうえで、ガンジス川の汚染問題と浄化プロジェクトの進展について検討している。

「北インドの結婚式の変化—チャイからコーラへ」(八木祐子)は、農村部でも出稼ぎ収入、社会基盤の整備、メディア情報の流入、教育レベルの上昇などを背景として、結婚式の形式、儀礼や歌、持参財、結婚相手探しなどに大きな変化がみられること、そしてこれらの変化は行動規範意識やジェンダー関係そのものの変化を反映していると論じている。

「インド映画—100年の魅力—世界最多製作国の輝きと変遷」(松岡環)は、100年の歴史を迎えたインド映画について、その歴史的展開や言語別制作の状況、近年の経済発展にともなうシネコンの増加と内容の変化や客層の動向について紹介しながら、インド映画は時代の空気をやや先取りしながら、観客に対する啓蒙的な役割も担っていると指摘する。

「インド音楽の世界—楽器に見る人々の『こだわり』」(田中多佳子)は、インドは多様な自然環境、言語、宗教、社会階層などが反映される形で「楽器の宝庫」となっているが、音楽があくまでインド音楽である限りにおいては、外来楽器や電子楽器などでも容易に導入するとして、インド音楽の寛容さと「こだわり」について論じている。

「インド文化の多様性と統一性—『ラーマヤナ』とカレー料理を例として」(辛島昇)は、インドではひとつの作品に限定されない多様な「ラーマ物語」が存在し共有されてきた例や、地方、カースト、宗教などにより多様でありながらもカレーが食文化に統一性を与えてきた例をあげて、インド文化の多様性と統一性の特徴について論じている。

「南インドのカーストとジェンダー—ケーララにおける母系制の変容を中心に」(粟屋利江)は、カースト秩序を形成・維持する要素としてジェンダーが重要な機能を果たしてきたとの認識のもと

に、ナーヤルの母系制と成員の義務と権利がイギリスによる司法制度の導入によって法的実体となったことや、ナーヤル知識人層の近代家族への希求によって大きく変容したことを分析している。

「インドの移民・聖性の移動・環境変化」(重松伸司)は、インド人にとって「聖なる水」はどのような意義を持つのかという問題意識から、在外インド人の歴史を概観するとともに、ガンガーの聖水のネット販売が在外インド人の自己意識を補強していると指摘し、そして聖水の大本であるガンガー川の水質汚染と浄化計画の推移について解説している。

「ヨーガの要諦とヨーガのグローバル化をめぐって」(山下博司)は、古典的ヨーガについて、基本となるアシュターンガ・ヨーガの解説からその要諦を示したうえで、本来は心身の相即にもとづくホリスティックなものであるはずのハタヨーガが、世界的なブームのなかで部分的に切り刻まれ、矮小化され、商業化されていることに警鐘を鳴らしている。

「パキスタンにおけるムスリムの NGO—ハムダルドの理念と活動」(子島進)は、イスラームの伝統医学ユナーニーの製薬会社が、イスラームの喜捨の精神にもとづいて、その利益をワクフとして提供し、財団を通じて様々な社会貢献事業を実施していることを取り上げて、イスラーム的価値観に根ざした NGO の活動の貢献について紹介している。

「ベンガルのパウルの世界」(外川昌彦)は、ベンガル地方の宗教詩人・修行者であるパウルの導師フォキル・ラロン・シャハの歌の分析を通して、タントラ仏教やイスラームのスーフィーに通底する多様な要素がありながらも、同時に宗教の違いを認識しながらも普遍的な宗教経験を洞察し、追求したラロンの世界が、ベンガル地方を特徴づける宗教文化の多様性と歴史的共存を可能としたひとつの背景となっていると論じる。

「スリランカの民族問題と NGO 活動」(澁谷利雄)は、スリランカにおけるシンハラ人とタミル人との民族問題と 2009 年に終結した内戦の要因に関して、仏教とシンハラ・ナショナリズムなどの思想的観点から分析するとともに、自らの災害復興活動経験を踏まえながら、現地の NGO 活動の課題について論じている。

『「仏教王国ブータン」のゆくえ—民主化の中の選挙と仏教僧』(宮本万里)は、ブータンが近代国民国家へと進むなかで、国籍法や文化政策によっていかに「ブータン人」がつけられてきたのか、また環境政策が仏教思想と結びつけられる一方で、仏教僧や(在家者を含む)宗教組織関係者には選挙権がないことなど、ブータンの現状を詳しく報告している。

「流動するネパール、あふれるカトマンドゥ盆地」(石井溥)は、ネパールの地理、言語、政治過程などについて概説したうえで、民族・カースト間の格差の存在を指摘し、さらに留保制度の制度設計に絡んで生じた、民族、カースト、ダリット、マデシなどをめぐる「人の再範疇化」が利益や権利の新たな対立を生む可能性について論じている。

以上、各章については長年の現地での調査研究の実績を有する筆者たちによって、様々な具体的課題が取り上げられて解説されており、まえがきで述べられていた「現地体験に根ざした観点から

読み解く」、「現代的課題を盛り込むことで地域を位置づける」という目的はかなり達成されているといえよう。また、各章が壁画、結婚式、映画、楽器、水など、具体的なモノやコトを事例として取り上げて、そこから地域の特徴や変化について敷衍して論じていることは、本書の特徴であり魅力となっている。さらに各テーマの概要や経緯をまずていねいに説明したうえで、近年の変化や課題について具体的に解説している点も、この地域になじみのない読者向けに親切なものとなっており、高く評価したい。各章が一般向け講座の内容を論集用にさらにブラッシュアップし、より専門的な内容や視点も盛り込むように努力した様子もうかがうことができ、この地域の専門家にとっても読み応えのある有意義なものとなっている。

南アジア地域に関する概説書は決して多くはないなかで、本書はこの地域の最新の動向を伝える良書となっている。しかしながら、基本的には概説書・論集としての仕上がりを高く評価しながらも、(紙幅の制約もあるので各章に対するコメントは控えるとして) 編者による解説と全体的な構成について、いくつか気になったことを最後に記しておく。

本書は講座内容を図書化したものであるゆえに、おそらく編者による解説は「序章」レベルではなく、「まえがき」とされているのであろう。しかし本書がもし一般読者や大学生などを想定しているのだとしたら、南アジア地域の全体についてもう少し解説があった方が親切ではなかったであろうか。まえがきには各国名がざっと挙げられているが、そこにはモルディブは含まれていない(モルディブを扱った章がないからであろうか)。ASEANほど強力ではないとはいえ、南アジア地域協力連合(SAARC)という枠組みがあることも言及されておらず、地域全体を示す地図も掲載されていない。英領インドからの印パ分離独立、さらにパキスタンからのバングラデシュ独立という経緯など、各国間の関係性についても触れられていた方が、読者が地域全体をイメージする一助となったのではないだろうか。本書の主題は政治ではなく社会や文化とはいえ、これらの点は不足に感じる。

また、南アジア地域の研究者の数自体にも偏りがあるなかで、南アジア全体を扱おうとすると、どうしてもインド中心になってしまうのは類書同様、致し方ないところもあるだろうが、やはり本書においてもインドが突出しており、かつ周辺国との連関についても目配りがやや不足している感は否めない。

以上、いくつか気になる点はあったものの、本書は躍動する南アジア地域の今を伝える良書であり、あらゆる読者におすすめの一冊となっている。